

特集 英語が苦手な生徒への支援

学校研究への取り組みを通して

日 臺 滋 之

(玉川大学)

1. はじめに

筆者のゼミに、高校の英語教師が生徒の興味・関心を引きつける授業をしてくださったことで、学習が楽しくなり英語教師になりたいという夢を抱くようになった学生がいます。これは、後の各論で述べられているような教師の工夫で学習が楽しくなった好例といえます。しかし、個々の教師の実践だけではうまくいかないケースも多く、学校研究として英語学習の効果を上げる実践も必要だと思います。それは英語を苦手とする生徒を生み出さない実践でもあります。筆者が実際に関わった学校研究をいくつか紹介したいと思います。

2. 英語がわからなくなるのはいつ頃からか

ベネッセ教育総合研究所では、「中学生の英語学習の実態と、英語や外国に対する意識」について、2009年1月～2月に全国の中学2年生2,967名(有効回答数)を対象に調査をしています。その結果、「英語を苦手と感じるようになった時期」として、中1の夏休み後くらい(12.8%)から中1の後半(26.6%)にピークを迎え、中2の夏休み頃(3.8%)に苦手と感じるようになった生徒は、中1の始め頃(16.2%)よりも少ないことがわかっています。多くの生徒が英語を苦手と感じるようになった中1の夏休み後くらいというのは、教科書では三人称単数現在が導入されたり、doの疑問文に加えてdoesの疑問文が出てきたりと、言語操作が複雑になり、語彙も増えていく時期と重なります。

この調査からわかることは、英語に対する苦手意識を取り除くためには、中1での英語学習がとても大切であるということだと思います。

3. 英語がわからなくなる要因について

英語の授業で学習したことが定着していかないと授業がわからなくなり、授業について行けなくなります。この原因は、授業時数とも関連があると思います。ELEC Crossroads Projectの「英語教育の目標および目標達成の方策」という政策提言の中で、英語が定着しない状況を以下のように分析しています。

「現行の教育課程で公立中学校では週3～4時間の英語授業を行うことになっているが週4時間としても学校行事、祝日などの関係から実際に行える授業頻度は週3.5時間内外である。週7日で考えると1日おきということになる。次の授業までに習ったことを忘れ、また新しいことを習っては次の授業までにまた忘れてしまったことのくり返しになってしまいがちである。中学の基礎英語さえ多くの生徒に定着しない現状は、このような中で生まれているのである。」

この英語の週時数からくる^{かんげつ}間歇的な英語学習は、教師の努力だけでは解決できず、制度に工夫を加えないと解決できない問題であると思います。

4. 学校研究により学習効果を上げる取り組み —英語を苦手とする生徒を生み出さないために

(1) 少人数指導と習熟度別指導

筆者が1981年に赴任した長野県の山間部にある中学校は、各学年2クラスの小規模校であり、ここではすでに少人数指導、習熟度別指導が行われていました。英語の授業が始まると、2年生の英語を苦手とする生徒6人ほどが、所属教室を離れて別教室に移動し、習熟度別授業を受けていました。

授業を担当してみると、少人数の生徒の教室だけに、生徒は臆せず疑問点を教師に質問し、授業に関わることができました。これは、1対40の普通教室の環境ではできないことで、よかった点でした。一方、少人数指導で、苦手意識を持った生徒の教室は、仲間から学び合う場面が少なく、教室での学習のトーンが停滞気味となるのが課題でした。

(2) 複数教科によるモジュール授業

先述の長野県の中学校では、生徒たちが英語に触れる機会を増やし、学習効果を上げる目的で、1年生の英語の授業は、週に50分授業を2回、1時間を半分に割った25分授業を2回の週4回実施していました(当時、英語は週3時間)。25分にするために、数学の授業と組み合わせて時間割を編成し、数学では計算力を高める指導を、英語ではドリル的な活動に力点を置いた授業を行いました。教師は生徒と週に出会う回数が増え、生徒の学習状況がわかるし、生徒も英語に触れる回数が多いので反応もよく、週3時間の授業よりは効果があったと思います。

課題点もあり、前半の数学の授業の時には、私が廊下で待機し、25分たつと飛び込むように教室に入り、生徒をせかして教科書やノートを出させ、すぐ英語の授業を始めましたが、それでも5分前後の口スは出てしまいました。また、活動の途中で25分となり中断することもありました。英数とも、授業はドリル的な活動に絞られるので、活動計画や時間割編成に工夫が必要でした。現行の週4時間でモジュールを導入すれば、毎日英語に接するだけに効果が期待できると思いますが、時間割編成や効果測定の方法が課題になると思います。

(3) 文部科学省「研究開発学校制度」の利用

研究開発学校制度は、学習指導要領等の国の基準によらない教育課程の編成・実施が認められる制度です。東京学芸大学附属世田谷中学校では、2003年から6年間にわたってこの指定を受け、現行の学習指導要領と同じく英語の授業時数を、各学年140時間(35週×週4時間)と定めていました。さらに、3年間の英語の総時数を変えないで、1年生に英語の時数を集中させる授業実践を行いました。各学年週4時間の授業ではなく、1年生では週6時間、2年生・3年生ではそれぞれ週3時間とするカリキュ

ラム(6-3-3システム)で指導した方が、英語学習の効果が上がるのではないかと考えたからです。1年生の6時間の授業のうち、4時間は教科書を使っての授業、残り2時間は通して、「ALTとの授業」と「文法+αの授業」をそれぞれ隔週で行いました。

これは先取り型の授業ではなく、「ALTとの授業」では、生徒が教科書で学習した内容を使ってプレゼンテーションする授業で、「文法+αの授業」では、教科書で学習したことを丁寧に復習し固めていく授業です。英語に対する苦手意識の生まれる1年次にリソースを集中投下し、間歇的な英語学習の弱点を克服するという考え方です。英語科が中心とはいえ、他教科と授業時数の調整が必要ですし、職員会議での合意も必要になります。また、英語科の中でも、1学年により多くの時数を投入することで、かえって英語嫌いが増えてしまうのではないかと心配もありましたが、予想される問題点を解決しながら、他教科の教師の同意を得、研究開発学校への応募、そして審査合格にまでこぎ着けることができました。

この実践では、3人の教師が1年生を担当することで教師同士が生徒の情報をシェアすることができ、生徒の進捗状況が手に取るようにわかり、苦手とする生徒の早期発見とその対応をすることができました。また、6-3-3システムでないときには、中3の校内英語スピーチ・コンテストのスク립トの中には、部分的に何を言いたいのかわからない英文が何件かありましたが、6-3-3システムの生徒にはそのようなものはありませんでした。中1での成果が影響しているのではないかと思います。さらに詳細な分析については、金谷他(2012)をご参照ください。

以上、3つの学校研究を取り上げましたが、苦手対策あるいは苦手を生み出さない指導としての効果を検証するには、複数での学校での追試の実践が必要です。他教科の先生方とのチーム・スピリットを発揮し、学校研究に取り組んでみませんか。

【参考文献】
金谷他(2012).『英語授業は集中!—中学英語「633システム」の試み—』東京学芸大学出版会.
文部科学省(2014). 研究開発学校制度.
ベネッセ教育総合研究所(2014).「第1回中学校英語に関する基本調査(生徒調査)・速報版[2009年]」.
ELEC Crossroads Project(2014).「英語教育の目標および目標達成の方策」.